

四八 吉川元春書状写

なをく羽衣石儀可然調略之儀候間、此表之儀ハ則時ニ隙可明候、然間祝山之儀其間之事、木の根かやの根にて成共相堪事入儀候、此由可申遣候、為分別候、く

去十八日書状到来披見候、從北賀茂飛脚被差越候、彼表堅固之由先以肝要候、先日も飛脚被指越候処、通路にて搦捕、則はた物ニ上由從黒土も申越候、不及是非候、雖然、書中ニ手弱事共無之由候間、尤可然候、さては從隆景為音信井口被差出候而、銀子等被送籠之由可然候、自是も音信候て銀子五枚進之候、

一昨日廿一至伯州末吉陣易候、則今日可陳易候之処、佐波・小笠原はや半途までハ被打出候へ共、爰許無異候条、末吉にて待付、先様可打出儀定候、然間一兩日之儀は爰許居陣候、各上着候ハ、此表儀則至舟上陣易候て、八橋・舟ノ上の間に伝城并仕切之城一二ヶ所取付、以其上羽衣石可及行儀定候、何も様躰追々可申遣候、此口行間之儀、其表堅固之覚悟肝要候、祝山兵糧之儀、自本陣某元迄被送越之由候、通路不輒付て、于今少も不差籠之由、何共笑止千万候、何と様にも氣遣候て、少充成共差遣度事候、猶委細自市介所可申遣候、謹言、

(天正八)

七月廿二日

元春御判

(春綱)

湯原右京進殿

四九 吉川元春・元長連署状写

内々以申談辻、久米郡東郷之内式百石并以別所百石、
合三百石地進置候、以羽衣石一着之上、可有御進止
候、

(天正九)

霜月十四日

(吉川)

元春御判

元長判

元保

御陣所

(『秋藩閥閥録』志道)

五〇 毛利輝元書状写

近日は不能書信候、先以其口之儀、無相替事之哉、
蒙仰度候、松山辺之儀是又示預候、可得其意候、

一元春陣所馬野山之儀、山柄可然之条、要害取構之
候、普請等之儀、頓相調候間可御心安候、

一羽衣石之事、上衆引退候付而、以之外相弱候、随分
之者共、日々夜々取退候、無正儀仕合之由候、然共
境目大雪之間、只今指立及行之儀、不相叶候、可有
御察候、（中略）

（二五八二）

（毛利）

天正九年十一月卅日

輝元 判

（吉見）

正頼

広頼

御陣所

（吉見文書）

五一 吉川元春書状写

(紙) (因幡)

御折帟拝見候、仍鳥執之儀去廿五日落去候、数日之儀候条、雖覺悟之前候不及是非候、其付而早々蒙仰候、

(異) (伯耆)

本望候、上勢も悉打入当時無儀候、羽衣石之儀も頃殊外相草臥日々落人候、何も様子重々可申述候、御方之儀今程長田表御座候哉、御辛勞候、猶期来信候、恐々謹言、

(天正九年)

駿河守

十一月十五日

元春御判

(元尚)

井原小四郎殿

御返報

(山口県文書館所蔵文書「譜録」)